

## 大学の教員は学生に何を教えるか



野上 憲男

(京都経済短期大学長)

### 緒言

新年明けましておめでとうございます。年頭に当たり私の拙い教育観、教員の務めについて所感を述べさせていただきます、ご挨拶にかえさせていただきます。私が教員生活を始めてから三十八年目を迎えますが、その間教育、研究、教育行政の面で試行錯誤の連続でした。一研究者、教育者として自分なりの研鑽を積んでまいりましたものの、反省の気持ちでいっばいです。しかし、この年になりその本質のようなものの意味を多少実感することができるようになったというものの、自らの研究、教育の成果が教育界、一般社会のニーズにどれ程資するところがあつたかを考える時、空しい気持ちを抱かざるを得ません。率直に申して、その間に研究者という美名のもとに幾度教育界から逃避し、挫折しかけたかその数は数えきれない程です。私なりのささやかな研究が大学の教育の場で受講生である学生にどれ程の教育的効果を与えることができたろうかと考える時、恥ずかしくも申し訳ない気持ちでお詫びしたくなります。殊に、大学という高等教育の場に於ける教育が十分

に実践できたと感じられるのは年に数える程でした。そのような未熟な教育者の愚かさを叱咤激励してくれましたのは受講生そのものであったと心の中で感謝しています。その感謝の念が冷めやらないうちに、私は講義を終えた後毎回自分の研究室でその日の担当した講義を内省することになっています。そして、心安い受講生に間をおかず自らの教育内容、講義の説明、学生の理解度などについて尋ねることにより、自らの向上、改善に役立てています。何故なら、学生は教員にとって自らの教育成果を正直に映してくれる教育、研究の鏡であるからです。このような考え方は、大学だけではなく、小、中、高の教員にも当てはまるでしょう。そこで、この場をお借りして大学の教員は学生に対して何を教えるのかという素朴な問題について、大学とは何か、教育とは何かという問題にも言及しながら自らの所感を述べさせていただきます。

### 一 教育、殊に「大学教育とは何か」

まず、高等教育機関の最高峰である大学とは何かについて述べさせていただきます。本来、大学とは様々な分野のカレッジからなる総合的研究、教育の場であることは言うまでもありません。例えば、英語ではユニバーシティ (University) と呼ばれますが、果してその本来の意味は何でしょうか。私は次のように考えています。Universityとは多を一なるものにする事、即ち、それはラテン語を用いて表現するならば一目瞭然です。それは unius (one) + versus (vertere, to turn) となります。哲学的表現で説明するならば、それは「一つの全体」ということになります。つまり、大学とはその一つの全体 (universum, the whole) という認識のもとに研究、教育が実践される場です。その根底をなすものが知を愛する学問たる哲学 (philosophy) であり、体系的に理論面と実践面から諸々の教育を提供する場が大学と言えるのです。勿論、大学は地域の要請に応じることができなければならないということは言うまでもありません。ここで、一つの全体とは何であるのかを考えてみたい。それは一つあって、一つしかないもの、即ち、真理、真実です。言い換えるならばそれは普遍性です。この真理たる普遍性は偏在するが故に、見えすぎてかえって人間の目には見えないものです。

しかし、我々教員は大学という場において様々な分野からその真理を探究する努力をしているわけです。つまり、その不可視のものを可視的にとらえるのが研究であり、それを学習者、社会の人たちに伝えようと努めることが教育と言えるのではないのでしょうか。その教育の本質的な意味をいまいし考えてみるならば、教育そのものにも可視的な面と不可視的な面とがあります。大別するならば実践と理論ということでしょう。この二つの面はそれぞれ対立する関係にあるというよりも、むしろ恒久的な二律背反的關係を有していると考えます。このような概念は我々が生を営むこの美しい地球上に昼と夜が同時に存在しているという一見矛盾的な発想に起因するのです。しかし、見方を変えるならば昼と夜の関係は夜と昼との関係とも言え、両者は互いに対立する概念に思えるものの、一方が他方を、他方が一方の存在の意味を醸しだしていると言えるのです。それは哲学的表現を用いるならば矛盾的自己同一の原理を例証する現実的な証なのです。即ち、理論と実践は二律背反な関係を有するように思えるものの、それ故に教育、学問の世界に於いて論議、問題、疑問が提起され、対立することによって相互的な和解の必要性が生まれてくるはずなのです。ここで大切なことはその両者が対立するという事実ではなく、両者が接触する見えない境目に我々が留意することの必要性です。つまり、その二者の境を合一するものこそ考える葦である人間の知性であり、創造的想像力でもあります。実際、我々人間の思考作用は対立概念の和解によって一つの全体なるものを目指して存続するのです。概して言うならば、この和合の点を見出すことのできるように日夜努めることこそ教育の出発点であると考えます。何故なら、人間は矛盾的自己同一の原理を宇宙の開始以来続けているこの地球、即ち、自然を我々の真に偉大な師として仰ぎながら生きてきているからです。我々教育者は自然の法則に立脚して、自然な教育の構築に励みたいものです。

### 二 大学の教員は学生に何を教えるのか。

では一体大学の教員は学生に何を教えるのだろうか。承知の通り、学究の場では諸々の分野で様々な研究、教育が実践されています。しかし、指導者である教員は学生に何を教えているのかという意識は希薄であるよ

うに思われます。理論、論理、原理、方法論、実験等が指導されていることは承知の事実です。この場合、指導者である我々教員は「受講する対象者であり、教育実践の主役たる学生とは何か」を正しく認識する必要があります。学生とは「何かについてしきりに知りたがっている主体たる存在」です。我々教員は客体的存在です。その逆も真なりです。つまり、教育の場にあつては主体と客体が一つになること、即ち「主格の合一」が求められます。主格の合一の認識のもとに学生は立派な教員によって能力の開発が行われ、同時に教員は優れた学生に接することによって養成されるのです。この単純で複雑な関係が見事に教育的バランスを構築する時に真の学究の教育効果が生まれるのです。大学教員の本来の務めは単なる知識の伝達、安易な方法論を伝達するだけではなく、学生の個性を尊重したきめ細かな彼ら自身の立場に立った教育活動が不可欠なのです。教育の実践の効果は学生数、財政的規模の大小によって生まれるのではなく、教える側と学ぶ側との意志疎通のもとに個性豊かな教育効果が生まれるような有機的な環境づくりに我々は励まなければなりません。大小を問わず、いかなる形態の大学というキャンパスも砂粒の如くの真理を探究する素朴な一つの全体的組織なのです。例えば、我々の在住する地球のことを考えてみてください。地球というこの広大な大地も一粒の砂から構築されているはずで、エジプトの大ピラミッドと言えども、一つ一つの均整のとれた石積みから一つの全体が構築されているのです。そして、その土台は凹凸を繰り返す一枚の平らな岩盤から成り立っています。教育の世界もこれらの例えと何ら異なることなく、部分と全体という有機的な関係から成り立っているはずで、即ち、自然の法則に則った自然な教育活動が永遠に求められているのです。しかし、言うは易く、行うは難しであり、その実際的な効果をあげることは大変難しいのが実状でしょう。私の奉職する教育の場は経営情報学科という単一の学科からなる小規模校です。小規模校であるがゆえに何か大きな仕事を実現できるのだと教育、研究に励み、教育者としての自覚と共に喜びを学生と共有しあっています。私自身の教育者としてのモットーは短大だから不可能ということではなく、短大だから可能なことが沢山あるという考え方を常に持ちつづけることです。勿論、学生数、財政面、そして学生を収容できるスペースの広さに恵まれていることにこしたことはありません。しかし、教育の現場で学生を教育するのに、物理的なハード面は第一義的要素ではないと思

ます。例えば、吉田松陰の松下村塾、ギリシャのアカデモスの森に於ける哲学の森のことを考えてみれば明らかです。教育は自然を師とした人間形成に真に資するものでなければなりません。したがって、教員には環境があつてこそ教育ができるというのではなく、自然環境を活用し、自分の身の回りのものを教材のヒントにする創意工夫が求められます。我々教員は学生共々に日常生活の中で、平素から知的好奇心を抱きつづき、きめの細やかな小回りのきく教育を実践することが、全体教育の効果を生み出すことに結びつくと考えられるはずです。私どもの大学は「ハタラクニスル」という共通意識のもとにこれからの十年を経て日本一の教育機関づくりを目指しています。どんな大学といえども最初から大規模であったはずもなく、又我が国の教育界の将来を見据えるとき、小回りのきく場こそ最大の教育、研究成果を生み出せるという信念を抱き、教職員と学生、そして卒業生共々がんばっています。さて、話をもとに戻し、教員は学生に具体的に何を教えるのかを簡単に述べさせていただきます。

### 三 教える側は人間であり、受講する側も人間であることの自覚

人間が人間を教育することの簡単そうであるが、この上なく難しい問題を今一度考えてみたいと思います。実際、教員は学生、生徒に何を教えるのかという問に対し、明確に即答できる教員が果してどのくらい存在するでしょうか。知識を伝達するだけならば特別な研究能力を備えた人材はそれ程必要ないでしょう。研究能力とよき教育を施すことが有機的な関係を有していることは言うまでもありません。しかし、教育の世界では教育を施す側も、施される側も互いに人間同士です。人間 (man) の原義は思考する (to think) 生き物であり、それを他者、周囲に伝達する生き物であるということです。従って、そのような能力の開発が必然的に求められるはずで、このような能力の開発に際しては一部の特別な分野を除いては教える側に特別な才能は必ずしも必要でないでしょう。英国の自然詩人W.ワーズワースの言葉「思いは高く、暮らしは質素に」という人間としての素朴な自覚があれば誰でも教育はできるものです。教育に携わるものは抽象的ではなく、具体的に行動で

示すことができる理論を備え、身の回りの自然の中から教材を導き出し、分かりやすく、しかもそれが学ぶこととの喜びと達成感を味わわせることができるように創意工夫することが必要です。このことは大学という高等教育機関だけの問題でもないでしょう。我々は象牙の塔で何か世間と遊離した特別のことをしているのだという意識を捨て、現実的な活動を継続すればよいと考えます。何故なら、研究であれ、教育であれ、創意工夫あるいはしつけは人類が地球上に出現して以来本質的に何ら変わっていないからです。よき教育を実践するにはいろんな方法があることでしょう。私自身はごく平凡なルーティンな活動から始めています。諺に曰く、「礼をつくすのにお金は要らぬ」。まずもって、キャンパスの中で出会う人には誰に対しても挨拶を交わすことです。無視された時でも自ら声をかけることです。このような簡単で、当たり前のことができないようでは如何に高等な研究成果を生み出そうと社会生活の中で組織人として人間らしい生を営むことは到底期待できません。それは現在の世相の中で如何に理解したい現象が横行しているかを見れば一目瞭然です。従って、平素から大学の主役である学生の目線で教育し、語り合うことが必要です。大学の教員は研究室に閉じこもるだけでなく、自らの足で実際に現実の中を歩き、問題を見つけたなら、即学生と一緒に問題解決に取り組む姿勢が必要であり、研究面に於いてもそうあるべきだと私は考えています。教員もそうですが、学生自身も常時何かを考えています。教員は彼らの顔を見るだけで、その表情から彼らの思考していることを即時に見抜く姿勢を備えていなければならないのです。次に、学生は教員に声をかけてもらうことを自己の心の拠り所の一つにしているのです。勿論、万能の教員などいるはずありませんが、そうなるように努めることは不可欠です。彼らの胸襟を開かせるにはどんなに厳しい指導を行っても必ず、一度は彼らのよい点を褒めてやる必要があります。そうすることによって、学生個々が自分に対して学び、生きる自信を身につけることが可能になります。そして、一つ一つの小さなことが全体を構築してゆき、自分自身もそれに参画する重要な一人の人間であることを確信するよう仕向けることこそ教員に求められる大切な要素であると私は考えます。高度な研究能力の養成だけでなく、真の意味でのゆとりのある自己を絶えず内省しつつ、社会の一員たることの自覚と一人間として将来何をすべきかを考えることのできる人づくりこそ最も大切であり、それを支援するのが教員の基本的な、地

味ではあるものの極めて大切な義務であると言えないでしょうか。私たち教員は当然のことながら、人間であることを常に意識し、対象たる学生も大切な人間であることを考え続けることこそ教員の基本的な本分でしょう。以上、これまでの長い教員生活を通して感じてきましたことを述べさせていただきましたが、これは結局、自らに対する自戒としてお許し下さい。日本全国の大学の教職員が相互依存的な発想に立ち、有機的な高等教育機関としてがんばりたいものです。そのためにも積極的に情報交換を行いましょ。最後に、どのような分野であれ、大学の教員が学生に教えることは自らの経験を通して、そして教育、研究を通して学生自身が他を思いやる、温もりのある人間に成長することのヒントを授けてやることではないでしょうか。大学は人間形成の場です。